

## 歴史と私 ―なぜ歴史研究者になったか

塩出浩之

子どものころに触れた「歴史」といえば、世界の偉人の伝記全集や日本史の読み物全集を愛読していたことを思い出す。しかし、これらは私が歴史学者となったきっかけではない。ロボットアニメや特撮の変身ヒーローなどに夢中だった当時、私の夢は「科学者になってロボットを作ること」だった。日本史の読み物全集の中で特に記憶に残っているのは戦国大名を扱った巻であり、物語として楽しんでいただけだったように思う。

ところが、中学生になった私は化学を苦手科目とするようになり、さらに高校生になってからは物理で赤点を取った。こうして私はロボット開発の夢をすっぱり諦め、進路をいわゆる「文系」へと絞った。

一方、高校で日本史を学ぶ中で、授業で先生が語る近現代史に疑問を持つようになった。明治維新後、人々が政府に対して国会の開設を求めた自由民権運動は、近代日本の輝かしい側面として語られる。ところがその直後、日本は日清戦争に突入し、アジアへの侵略によって近代日本の評価は暗転する。

私が不思議に思ったのは、日清戦争の時点では既に国会（帝国議会）が開設されており、日清戦争が国会の全面的な支持をうけて戦われたことである。なぜなら、国会開設を望んだのは自由民権運動に参加した人々であり、その中には国会議員になった人々も多かったからである。なぜ近代日本の輝かしい側面を代表する自由民権運動に参加した人々が、近代日本の暗転につながる日清戦争に賛成したのだろうか。

大学受験に向けて勉強している中で出会った一冊の本は、この疑問に答える手掛かりを与えてくれた。当時、東京大学教養学部の教授だった鳥海靖先生が著した『日本近代史 国際社会のなかの近代日本』（放送大学教育振興会、1992年）である。鳥海先生は同書で、近代の日本で「ナショナリズム」が「国民に浸透」したことを指摘されていた。ナショナリズムという概念に関心を持つようになったのは、おそらくこの時からである。

とはいえ大学受験の時点でも、私は歴史学者を志していたわけではない。ロボット開発を諦めた高校時代の私は、フランス文学者の蓮實重彦や、哲学者の柄谷行人といった人々による「現代思想」の著作にすっかり魅了されており、大学で英語の次に学ぶ第二外国語もフランス語を選択した。今から思えば、あのとき中国語や朝鮮語を選択しておけばよかったのだが、当時は全く頭にもなかった。ただ受験の時に内心考えていたのは、大学を卒業して就職するよりも、大学に残って学問というものをしてみたいということである。

1993年の春、私は東京大学に入学した。授業が始まった初日に、偶然の、そして後から思えば運命的な出会いがあった。

1 時間目の授業で、私は国際関係論の講義に出席した。「国際関係論」という授業名はいかにも大学らしいので、好奇心に満ちた新生としては是非とも聞いてみたい授業だった。ところが、好奇心に満ちた学生は私だけではなかったので、教室に学生が満員で、それでも入りきらないという事態が生じた。先生の判断で、もっと広い教室に変更して翌週から講義を始めることとなり、わずか数分で授業が終わってしまった。

まだ 1 時間目が始まったばかりだったので、私は別の授業に出てみることにした。授業名は覚えていないが、日本史の講義だったことは確かである。教室に入って、しばらく先生の話の話を聞いていると、日本の歴史教科書と韓国の歴史教科書とでは歴史の見方が全く違って、どうやって共通の理解を見出せばいいのか非常に難しい、という趣旨のことを言われているようだった。私が想定していた「日本史」の講義とはかなり違っていたが、強く印象に残った。私は「国際関係論」ではなく、この授業を履修することにした。

この話をされていたのが、後に恩師となる三谷博先生である。三谷先生は当時、日韓の学者や教育者の間で、両国の歴史教科書をめぐって行われていた交流事業に関与されるようになり、そこで出てきた悩みを講義の場で吐露されたようだった。私にしてみれば、そもそも歴史の見方が国によって違うという話自体が新鮮だったのに違いない。それは私が高校時代に日本史を勉強して抱いた疑問にもつながっていたはずである。

私は次第に歴史学、特に日本近現代史という領域に手応えを感じるようになり、次の学期には、三谷先生が開講された 1 年生向けのゼミに参加した。2 年生になると、なんと幸運なことに、三谷先生が大学院で開講されていたゼミへの参加をお許し頂いた。「三谷ゼミ」は、韓国や中国からの留学生が参加者の大半を占めていた。これまた、国によって歴史の見方が違うことを痛感させられる貴重な場であり、私は結局、その後約 10 年間「三谷ゼミ」で学ぶこととなった。

こうして振り返ると、私が日本近現代史の研究者という道を選んだ直接のきっかけは三谷先生との偶然的な出会いのようだ。ただ、この出会いがただの偶然に終わらなかった理由を考えると、私が日本近現代史を学ぶなかでナショナリズムと歴史認識という二つの問題に目を開かされたことが大きい。今もこの二つの問題に強い関心を持っているため、なおさらそう思えるのだろう。

#### ■塩出浩之／SHIODE Hiroyuki

1997 年東京大学(教養学部)卒業、2004 年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術)。現職は、京都大学大学院文学研究科教授。専門分野は日本近現代史(政治史)。主な著作：『岡倉天心と大川周明 「アジア」を考えた知識人たち』(山川出版社、2011 年)、『越境者の政治史 アジア太平洋における日本人の移民と植民』(名古屋大学出版会、2015 年)、編著『公論と交際の東アジア近代』(東京大学出版会、2016 年)。